

熱意のこもった三味線や鼓の演奏、また唄に、大きな拍手が送られた。市民芸術文化会館(りゅうとぴあ)能楽堂。地方の稽古を重ねている若い芸妓らの発表会が3月24日に開かれ、事前に申し込んだ市民ら約380人が鑑賞した。公演終了後、楽屋には舞台を終え晴れやかな顔で出てきた芸妓たちがあった。

長唄の古典「鞍馬山」で唄い手を務めた芸歴6年の小夏さん(24)。「曲のイメージをしながら歌えた」と表情には充実感がうかがえた。

小学4年から高校3年までジュニア合唱団に所属したが、邦楽は発音や口の開き方が難しいという。「頑張ってまた稽古します」

芸の道追究 伝統継承へ心一つ



と反省も忘れなかった。

「鞍馬山」で大鼓を担当した芸歴4年の結衣さん(22)は「舞台に立つのは気持ちよくて楽しい」と振り返りながら、「もっと稽古が必要だと感じた」とさらなる精進を誓った。

古町花街では今、地方の早期育成が一番の課題だ。地方をこなせるベテランの「お姐さん」芸妓が60〜70代となっているためだ。

花柳界などで「育成支援協議会」を発足させ、三味線などが若手芸妓の必修科目になったのは2013年から。協議会によると、年間の育成事業費は約800万円。新潟市などから補助を受け東京から師匠を招くなどしている。

三味線などの師匠の岩田喜美子

さん(68)「東京」は、公演終了後の楽屋で「育成事業が始まって4年だが、どんどんうまくなっている。若手の今後が楽しみ」と期待した。

だが、ここがゴールでない点が地方の難しさだという。芸歴60年の福豆世さん(76)は「お祝いや接待の場として使われるお座敷では、芸妓がこなせなければならぬ演目は数多い。四季によっても違ふ」と語る。

「伝統をうまくバトンタッチしたい」という福豆世さんは、日常の稽古の空き時間には若い芸妓の前で演奏し、彼女たちが希望するスマートフォン動画撮影にも応じる。「あの子たちの芸の幅を1日でも早く広げてあげたい」

発表会の名称は、「華つなぐ道」だった。伝統技能が途絶えないよう、芸を究めようとする道はこれからも続く。

発表を終え、舞台の袖を歩く芸妓 新潟市中央区



①大鼓や三味線の上達ぶりを披露した柳都振興所属の芸妓

②唄い手を務めた柳都振興所属の芸妓

③発表会ではベテランらが地方を務め若手の踊りも披露された＝いずれも新潟市中央区

